

たるものなれば、和服は和服として其發達の頂點に達し、洋服は又洋服として其發達の頂點に達したのであります、従つて之を折衷したる改良服は、其何れよりも劣ること勿論なれば、和服兩式中孰れか一方を擇んで用ゐる事が必要です、然るに現今の和服は種々の點に於て洋服より劣り居れば、早晚洋服にする時代が來るのであります、服装を洋服に改良しようといふには、先づ住家の改良から着手しなければなりません、此住家の改良問題が快く解決せられる後、始めて洋服が一般に使用さるゝ事でありませう。

▲ミシン裁縫と婦人病との關係

女子がミシン裁縫に従事すると、住々婦人病に罹る虞あるやうに思はれ、練習を希望する女子の間にも、之を恐れて修練を避くる傾向があります、是は全然謬想です。元來日本婦人の下着は不完全を極め、椅子にでも腰掛けると直ぐ風が下から入るやうな製作法なれば、椅子を使用する際には、豫め之に對する準備を爲すことが肝要です。西洋諸國の家庭にては、一般にミシン器械を使用し

居るに拘らず、其爲に婦人病が多いなど、いふ事を聞きませぬ。是が果して事實ならば、所謂婦人病は、器械裁縫の結果として起るものに非ずして衣服の不完全、其他衛生上の不注意に基くのではあるまいかと思はれます。以上、ミシン裁縫に就いて、平素考へて居ります、家事經濟上の關係やら、女子職業上の關係やら、其他のことを、概略ながら御話し致した次第であります。

占相

なにかし

人相、手相、筆相、などにて色々の占ひ事あるは人のよく知れる所なるが左に述ぶる諸相にも幾分の占ひ得る所あるにや讀者の御感に迄記して見ん

歩き方の相

○貴上の人自然と其體重くして脚軽く貧賤なるものは身軽くして脚重し、故に貴人は歩むに身

動かすして脚先へ歩む、貧賤の者は身軽く脚重

きが故に身先へ歩み足は跡に行く

○行くに跟地に落ちつかざる如きは横死するか住所に勞すこんな癖のある人は早速矯正いたしま

せんと大變で御座います、

○行くに頭を傾けまた歩むに身を振るやうなるは終に身衰ふ、

○行くに足の横に開くが如きは親の業を嫌ひ他國に流浪す、

○歩むに何と無く躁がしく又足音高きは大いに敗破す、

○龍行虎歩は大に發達功名を顯はす行くこと穩かに自然と勢ありて左右をかへり見ざるを言ふ、

○行くに鳩の啄はむが如きは發達なし短壽なり女は夫に縁無し、

○歩むに眞一文字の如く行くは急性なり俗に内蔵といふなり宜しからず親の家を破る、女は子無し。

○行くに足屈むか倒るゝやうなるは子孫の住所に辛苦す、

○蛇行は大に凶し人を害ふ、蛇行とは腰に力無く歩むに身の曲るをいふ、

○座して山の如く凝然として動かざるは座の徳なり故に座して膝を動かし用なきに度々座を動くものは一生名をなす事なしまた故郷を離るゝか祖業を破る何れも心の動きやすき人なり

○座して進退正節に言語應對穩なるは心術正し

○座して其形相泰然として山の如く動かざるは大貴の相なり

○臥 相

○貴賤男女に限らず臥して氣息耳より息するが如きは長壽也。

○臥して其様正しく息の外へ聞えざるは大に發達し高名をなす。

○臥して寢苦しき様なるは常に辛勞絶えず短壽なり、

○座臥共に涎を流すものは子孫に難あり、

○小兒の齒ぎしりは早く親に別る大人は妻變る、

○兄弟不和となる、

○仰向きに寝て手足を伸すものは常に病あるか短

○ 壽なり

○ 臥して屈むが如くまた川流の如きは親の家を潰す、

○ 臥して物言ふやうなるは孤獨なり寝言を多く言ふは人の妬を受けるか妻變る、

○ 寢入つて物に驚きうめくが如きは妻と壽に障る

○ 眼を開きて寢入るものは横死を擬し口を開きて寢入るものは短命なり俯向きに臥るものは病身なり

○ 俗に枕寢りと言ふは立身早し躰は無病なれども賤し、

飲食の相

○ 飲食するに瘦せたる人は遅さが宜しく肥えたるは早さが吉し、

○ 物食ふに呑み込む時頭を動かすは短壽又は祿を失ふ、

○ 物食ふに鼠の如きは貪欲なり鳥の啄む如きは餓死す、

○ 男女ともに食は嗜むこと緩かなるは貴相なり冷食を好むものは下賤なり、

○ 咽を鳴らして食ふものは性急なり其の身に浮沈多し。

○ 口を開いて物食ふものは食に盡さる又口より漏こぼすは短壽。

聲 相

○ 俗に金切聲といふは祖業を破る女は夫の權を奪ふ子無し。

○ 女の聲何となく耳に徹するが如きは夫を尅す、其身不正なり。

○ 男女共に聲の發して締り無きは故郷を去るか常に散財す。

○ 女の男に似たる聲するは再三縁變る又色情にて身を沈む

○ 男に女の如き聲交るは不仕合。

○ 聲爽亮にして言語静止なるは皆發達榮昌を主る

○ 音聲濁りて爽かならざるものは皆發達なく高名ならず。

○ 官祿高き人はたとへ當時困窮なりとも言語穩かにて其聲丹田より出るものなり。また卑賤のものには金錢家財不足なくとも其聲必ず自然に濁る

か又舌編より出づるといふ。
如何んな事を根據として右の様な事を申したのか
解りませんがいつれ善くないといふ事は學ばず己
に身につける悪しき癖は一日も早くなほさなければ
ばなりません。殊に物摸擬たがる幼児等をお取り
扱ひにならるゝ方々は少しの癖もかなほしになり
ませんと子供等は何等の間にか同形の癖のつくも
の右おもしろいと思ひましたから一寸受け賣りい
たします。

幼児笑話

赤坂 貞子

五つと五才
お向ふの八重子ちゃん 今年取つて五つの可愛盛り或日遊びに來
られたので「八重ちゃんあなたのおいくつ？」と聞きましたら、圓い
目を見張つて「あたし五つと五才ま」

相摸 杉村

おんぶして淺草へ
「長ちゃん大きくなつたらだれをお嫁さんにするの」と五つの長さ
んに聞きましたら

僕春姉さんをお嫁に貰ふの」といひますので「それぢやお嫁さん
にしてどうするの」と又聞きましたら

僕の拙い處

岡山 吉岡 絹子

五つなる弟の清が「背中がかいから母さん早く拙いて」と云つて
母にかいて貰ひながら「母さんもつと上よもつと下よ」と云つて居
ましたがやがてじれたそうに「母さんには僕の拙い處分らない
のかな」

短歌

つゝましげに物言ふ人の袖ふきて紅梅かほる朝の露かな
ほのやかに瑞色なせるしのめやいろくきこひ初鐘の聲
鐘の音は花の匂ひをそとゆきて若草山にゆふかすむかな
雪の日や眼をやむ人をいたはりて共にきこつる鶯の聲
春若きみどりは雪の白妙にのときわ目だつ 朝倉 美知

戀やれし夕べふと見し白梅の光りのまいに冷たく匂はむ
なき罪をまゝ母に得て忍び音に泣くにも似たり 小野 春香
琴の音に匂ひたやよう梅の欄あや羽うちふる 吼雀 鳩かな
臘を涙とふたりそゝる行く花の下かぜ身に 瀧 渡る 琴
波の上を白魚をとる琴の手に銀燭ゆるゝ春風の宵 金 陵 子

薄ぐらも花の下かけ笛とりて吹くとしも無くさまよひし夜や
友をすてはらからを捨てなまじに世を咒ふべき都ぶり哉
朧月木かげに人のかけふたつきえたる跡を花吹雪する 櫻井 彌生

脊におへる稚兒のさしづにたとり行く世の道狭き我さだめ哉
世はなへて毒霧せまる立山のわめき聞ゆる地獄谷かも ちとせ 女
臆たけし尼君そゝる經とちてうなだれ勝ちに驚をさく
柔かき若草の野をさまよへるふりわけ髪にふく鶯の風 *

亡き人の宿世かなしむ春の日を
鐘とよみ鳴る花くもり哉
鳳凰堂朝日うらゝすき彫りの
天女に匂ふうこん櫻や

記 雲

（投稿隨意） 伊勢白子局區内 眞宮 宛